忘れな草

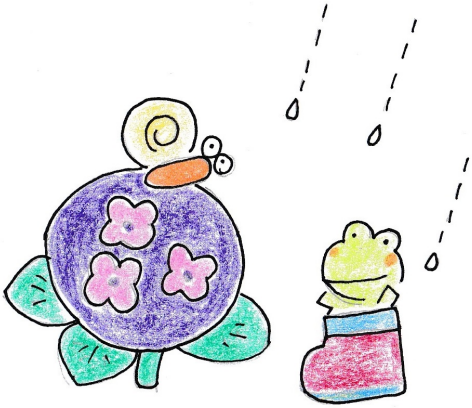
徳田千歌子

絵：　中野悦子

目次

はじめに　五
歌　九
一銭洋食　一七
長屋の友達　二三
電話　三一
疎開先での思い出　三七
編集後記　四九

はじめに



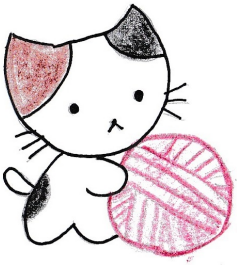
終戦後七十年を迎えた昨年、戦争の恐ろしさや悲惨さを子供や孫たちに知ってほしいとの思いから、夜な夜な手記を書き始めました。最初は家族に読んでもらうだけのつもりでしたが、それを息子がパソコンを使って本にしてくれたので、幾人かの知人に配りました。またインターネットで公開してもらい、多くの方々に読んでいただくことになりました。

拙い文章ですが、大勢の若い皆様に読んでいただき、本当に嬉しく思いました。戦争の悲惨さを知り、もう二度とあんな過ちは起こすべきでないという思いが伝われば、私としては十分満足です。読んで下さった方々からたくさんの感想を頂戴しましたが、中には「ぜひ続編を」という声もあり、こんなに有り難いことはありません。

前回、大阪大空襲から始まって終戦まで書いたので、続編と言っても、もう書

くことがあまりありません。息子に相談したところ「戦争前の事とか、戦後の生活の事でも書けば？」と言うので、それならもう少し書かせていただこうとペンを執った次第です。今回は娘が挿絵を描いてくれて、可愛い感じの本になりました。

今回は、感動することも涙することもありません。年寄りが暇つぶしに書いた文章で誠に恐縮ですが、時間のある時にでも御笑覧いただけたら幸甚かと存じます。



はじめに

歌

しとしとと降る雨に包まれて、いつしか想いは過去へと馳せる。過ぎ去りし日の悲しかったこと、辛かったこと、そんな記憶も今となれば懐かしい思い出。数々の風景が走馬灯のように頭の中をぐるぐると駆け巡る。

幼少の頃に父を亡くし、家も貧乏だったせいで、楽しい思い出は数少ない。私は子供の頃は、何事にも動じない性格だったと思う。

私が小学校三年生の時、担任の先生が大嫌いだった。とても綺麗な若い女の先生だったが、えこひいきが強く、金持ちの生徒は「〇〇さん、〇〇さん」と可愛がられていたが、私は嫌われていた。

三学期に学芸会があり、「蓄音機」というタイトルの歌をクラスで合唱することになった。「♪きれいな声で愛らしく　唱歌を歌う蓄音機」と、毎日毎日稽古をした。ある日、先生がオルガンを弾き、私たちが歌っていたところ、急にバーンとオルガンを止め、「その辺で変な声を出しているのは誰？」と言って私の側へ来た。

そして私を指差し、「あんたでしょう。変な声だから歌わないで、これからの練習も本番のときも、声は絶対に出さないで口をパクパク開けておきなさい」と言われた。

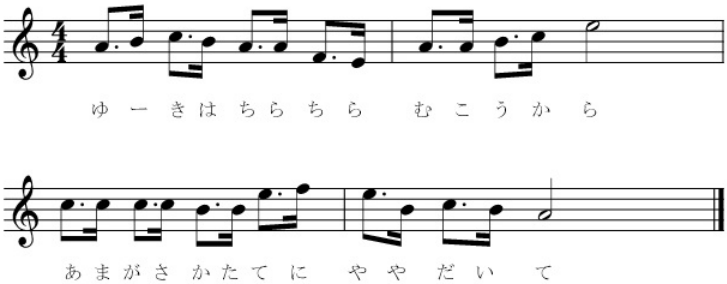
クックッと笑う友もいた。今から思えばひどい侮辱だと思う。自分でも歌は下手だと分かっていたが、やはりショックだった。家に帰って母に話したら、「へぇー」と言っただけだった。私が親なら、腹を立てて校長の所へ怒鳴り込みに行ったかもしれない。授業態度が悪いとか、何か訳があるのなら仕方ないが、声の悪いのは生まれつきで治らない。未だに歌は下手だが、あの時の悔しさは決して忘れられない。

そんな私でも歌は大好きだった。戦時中によく歌った、思い出の歌がある。

雪はちらちら向こうから
雨傘片手にヤヤ抱いて
坊や泣くなと嘆いても
死んだ母ちゃん帰りゃせぬ

母ちゃんと別れて早や七日
お召を受けしの父ちゃんも
行かねばならない戦場へ
行かれる父ちゃんよいけれど

あとに残ったこの坊や
どうして月日を送るやら
汽車の窓から手を振って
坊や行きます　サヨウナラ



採譜：徳田　寿

学校行って先生が
親のないもの手を上げよ
七十五名のその中で
坊や一人が手を上げた

親のないもの馬鹿にすな
親はあります極楽に
白いべべ着て数珠持って
大石枕に寝ています

悲しい歌だった。哀愁を感じる胸の詰まるようなメロディーで、私は大好きだった。学校でも大流行したが、戦時中にこんな歌を歌うのはいけないと禁止された。その代り軍歌を歌いなさい。「♪若い血潮の予科練の・・・」とか、勇ましい

軍歌ばかりが奨励された

「雪はちらちら」の歌は、当時意味も解らず歌っていたけど、改めて歌詞を考えると涙が出て来る。子供の頃、この歌を歌っていて長姉に注意された。「その歌は歌わないで。死んだ主人を思い出すから」と。姉の主人は戦場からアメーバ赤痢を持って帰って、四歳の男の子を残して死んだ直後だったのだ。私は「ごめん」と謝って、それからこの歌を歌わないようになった。

大人になり、子供を寝かせつけるときに、この歌をよく歌った。今頃になってから息子も娘も「お母さん、雪はちらちらの歌詞を覚えているか」と聞く。まだ何とか覚えていると言ったら、「書き残しといて」と言う。題名も解らず、歌詞もいい加減なものだが、懸命に思い出して書き記してみた。子供たちにとっては、よほどこの歌が印象深かったのだろうか。

歌はいいものだ。口ずさんでいると、その当時のことがありありと思い出され

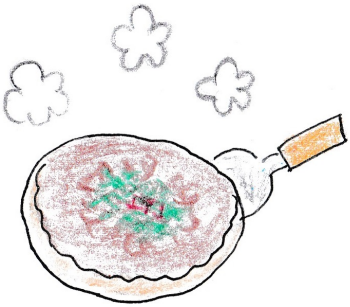
てくる。「雪はちらちら」を一緒に歌った友は、今どうしているのだろうか。あの時は挺身隊に行って、兵隊さんが使うテントの紐を組む仕事をしながら歌って、先生に叱られたのだった。

亡くなった母はよく「ここはお国の何百里」と歌っていて、よほどこの歌が好きなのかと思っていたが、今考えれば、戦死した兄のことを思い出して歌っていたのだろう。母の気持ちが痛く心に沁みてくる。

これから先も、様々な歌を思い出し、当時の頃を懐かしみながら歳を重ねていきたいものだと願っている。

歌

一銭洋食



幼少の頃から大阪育ちの私は、お好み焼が大好きだった。国道の傍に駄菓子屋があり、そこのおばさんがお菓子と共にお好み焼きを焼いて売っていた。当時は「一銭洋食」と言った。

炭火で熱した鉄板の上に、メリケン粉を薄く溶かしたものをお玉ですくって、丸く円を描くように流し込む。その上に、まず細かく刻んだネギを入れ、天かすと干しエビを入れ、その上にまたメリケン粉を薄く被せてジューンと焼く。ほどよく焼けたら裏返し、少し待ってもう一度裏返し、あとはお醤油を塗り、花カツオと青ノリをかけて出来上がり。

「アツー、アツー」と言いながら鉄板の上で切りながら食べる一銭洋食の味は格別だった。

当時、大きな道路では兵隊さんが鉄砲を担いで足並みを揃えて列を作り、「イ

チ・ニー、イチ・ニー」と行軍していく姿も見えた。子供たちは「わぁ、兵隊さんや、バンザイ！」と手を振って叫ぶ。そんな時代だった。

ある日、友達と一緒に一銭洋食を食べていると、店のおばさんが「あ、兵隊さんや！」と言う。私たちは手を止めて振り向き、「兵隊さん、バンザイ」と言ってしばらく眺めていたが、振り返ってまた食べようとすると、一銭洋食が減っていた。まだ少ししか食べてないはずだのに、半分くらいしかない。友達も顔を見合わせていたが、私たちが兵隊さんに見とれている間に、店のおばさんが皆のを少しずつ食べたのだ。その当時は食糧事情が悪く、食べ物を売っていた人でさえ、十分に与えられなかったということだと思う。

そんなことが二、三度あって、子供心に「損やなぁ」と思い、以後は友達と話し合って持ち帰って食べることにした。

「おばちゃん、今日は持って帰るしね」と言うと、「よっしゃ、待っててや」と言って、新聞紙を切ったもので包んでくれた。今日は丸々一枚食べることが出来る

と喜びながら持ち帰り、家で広げてみると、一銭洋食の表面に新聞の文字がべったりと写っていた。暑さで新聞のインクが溶けて写ったのだろうか。私たちは印刷の文字を見ながら食べたものだった。

今だったら、保健所へ持ち込んだり、大変な騒ぎになるだろう。そんなことが何度かあったが、私はお腹をこわしたこともなく、それほど汚いとも思わなかった。

今思えば不衛生な話だが、よく考えると、戦時中や戦後の食糧難の世の中では、そんな一銭洋食すら食べることができなかったのだ。さつま芋ばかり食べさせられ、終いには芋もなくなったのか、芋のツルを食べていた。パンの中にも芋のツルを粉末にしたものが混ぜられていた。

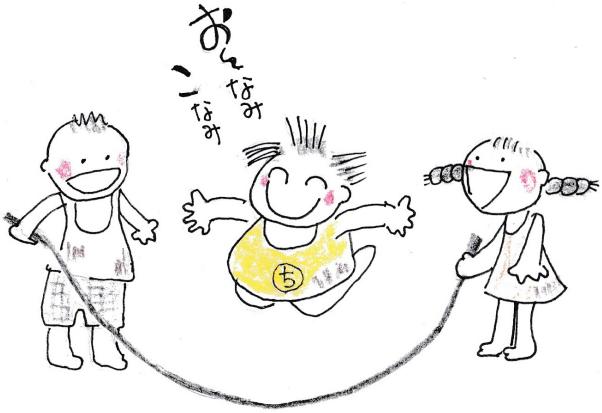
あの頃、一銭洋食が食べたくて堪らなかった。ある日母に「一銭洋食を食べさせてくれたら、いつ死んでもいい」と言ったことがある。実際にそう思っていた。

あれから何百回お好み焼を食べていることかと振り返ると、笑い話のように思

えて来る。ほんとに有難い時代になったものだと、多くの人たちに感謝して、一日一日を大切に過ごしている。

一銭洋食

長屋の友達



大阪に居た頃、私の家は五軒同士が向き合った十軒長屋に住んでいた。水道が各家になく、五軒に一つということで、この長屋には二つしかなかった。朝起きて顔を洗う時、いつも誰かと一緒になってイヤだった。一軒の家に八人という「大家族もあったが、何かにつけ大人数の家は水をたくさん使う。

「水道代はどうなっているのか？」と私は疑問に感じ、母に聞いてみた。「子供の心配する事ではない」と母は言ったが、私は隣のおばさんがいつもタライに一杯洗濯をしていることが気になっていた。

ある日、一軒置いた隣の空き家に、長野県から新しい家族が引っ越してきた。その人は、バケツに水を汲んで持ち帰り、家の中で顔を洗っているらしいと知った。あっ、私もそうしようと思い、家で顔を洗うことにした。

その家は大人二人、子供六人の八人家族だったが、上から三番目の子が私と同い年で、名前も千賀ちゃん。字は違うが同じ名前で、そのせいか二人はすぐ仲良

くなり、よく一緒に遊んだ。お人形遊び、ままごと、お手玉など、誰でもする遊びだが、二人だけでよく遊んだ。

それらに飽きると今度は漢字遊び。木偏の漢字がいくつあるかと、広告の裏に書き出していく。二人で一生懸命考えて、確か三十五くらい書いたと思う。あくる日はサンズイ偏。今思えば脳トレーニングごっごとでも言うべきか。

大勢で遊ぶ時は、縄跳び、ドッジボール、石けり、寒いとおしくらまんじゅうなど。特に印象に残っているのは、道の真ん中で蝋石を使って絵を描いたことだ。絵の上手い子は舞妓さんや流行りの漫画「のらくろ」とかを描いて、皆で遊んだ。夕方暗くなって日も沈み、カラスがカァーと啼く頃、「サヨナラ」と言って各々家に帰った。

家に帰ると疲れてすぐに寝た。テレビもないし、寝るしか仕方なかったのだろう。でも、それはそれで結構楽しかった。今思い出しても、とても懐かしく感じる。もう一度子供に帰ってみたいと思う。当時八歳〜十歳の私が現在八十四歳だから、当時の大人はたぶん亡くなっているだろう。

そんな長屋も、地下鉄工事のため立ち退きを命じられ、仕方なく引っ越した。長屋の皆さんとも散り散りバラバラになってお別れ。あれから何年経ったのか、指折り数えることもある。当時は引っ越し屋もなく、リヤカーに家具などを積んでみんなで運んだ。

今度の家は一軒家だったが、近所の子供たちとは馴染みもなく、長屋の家が懐かしかった。長屋に住んでいるときは、「こんな狭い家、早くどこかへ引っ越したい」と思っていたが、いざ引っ越してみると、長屋の良さが分かってきた。「お醤油ちょっと貸して」とか「炭貸して」とか、お互いに助け合って生活していたことが懐かしい。

子供の遊び事によらず、日常生活にもずいぶん苦労して節約してきたものだ。それも戦争のためで、国中が貧乏だったから仕方のないことだった。昔の人は我慢強く、偉かったと思う。今に神風が吹く、それまでの辛抱だと心に決めていた。「欲しがりません、勝つまでは」のスローガンが目に心に焼き付いていたのだろ

う。

電気も大切に使っていた。各家庭には電気の使える時間が決まっていて、夜六時になると自動的にパッと電燈がつく仕組みになっていた。秋や冬、特に雨の降る夕方には外へ出られず、薄暗くて本も読めず、電燈がつくのを恋しく待ちわびたものだった。

電球が切れた時には、指定の店へ持って行くと、ハンコ一つで無料で交換してくれた。ある日、家の電球が切れ、私がお使いで交換に行くことになった。母から指定の店を教えられたが、もうひとつ判らず友達に尋ねたところ、「この道をこう行って角を曲がったところに『さんば』と書いた看板があるから、そこから三軒目の鈴木電気店」と教えてくれた。

言われたとおりに行くと『さんば』という看板もあって、すぐに電気店がわかり、ハンコを押して新しい電球と交換してもらった。喜んで帰る途中、ふと『さ

んば』とは何を売っている所かと気になって家の中を覗いてみた。門の内側には庭があって、ニワトリがお婆さん一緒に遊んでいた。でも、何も売っている様子はなく、私は不思議だなぁと思いながら帰宅した。

そして道を聞いた友達に言った。「さんば屋さんには何も売ってなかったけど、ニワトリが三羽いるから『さんば』屋さんなの？」と。そしたら友達はお腹を抱えて笑った。「あんた、産婆さんも知らんの？」。その後も当分のあいだ友達に笑われ、恥ずかしい思いをしたことがある。

話は逸れたが、電気というのはほんとに有り難いものだ。今では生活も贅沢になり、暑くなれば冷房、寒くなれば暖房が欲しくなる。特に高齢者の私は、足が冷えると辛いので、冬場には炬燵が欠かせない。

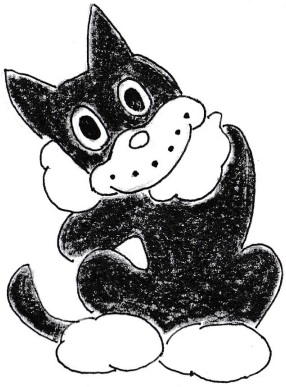
今は電気のスイッチひとつで暖かくなるが、昔は暖を取るのにも苦労したものだ。しっかりした木を四角に組み立て、中に瓦で作った器に灰が入り、その中に豆炭、タドン等を真っ赤に熱して入れる。そのヤグラ炬燵を部屋の真ん中に置き、

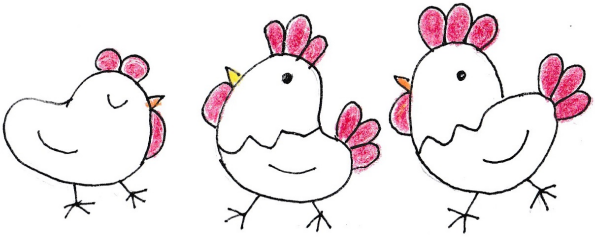
四方から布団を敷いて、四人が足を入れて寝た。

しばらくするとアンカが普及した。これは容器に石綿が詰められていて、その中に熱した豆炭を入れて蓋をして、布に包んで足許に置く。湯タンポは、ブリキか瀬戸物で作られた容器に熱いお湯を入れて、布で包んで使用する。これらは長い時期使ったので、ご存知の方も多いと思う。いずれにしても、豆炭に火を付けたりするのは手間のいる仕事だった。

今は何もかもが便利になり、生活にゆとりが出来、老いも若きも子供も、みんな楽しく暮らせて、ほんとに幸せな世の中になったものだとつくづく思う。

長屋の友達





電話

世の中が進むに連れて、何事にも大きく変わってくる。その中で私は、電話の進歩にはちょっと驚いている。

昔は普通の家には電話なんてなかった。あるのはお商売の家とか役所くらいのものだった。私の従兄妹が商売をしていて、店に電話があった。電話機が珍しくてじっと眺めていると、「千歌ちゃん、どこかへ電話掛けてみるか」と言われた。私は驚いて、「そんな、掛け方も分からないし、第一、掛ける所もない」と断った。「掛け方は今から教えてあげるし、掛ける先は天気予報でいいよ」と言われ、私は恐い気もしたが、一大決心をして電話を掛けてみることにした。

まず受話器を外して左手に持ち、右手で取っ手を三回くらい回す。手が微かに震えていた。

「ハイ、電話局です。何番ですか？」と女の人の声がした。「〇〇番をお願いします」と、私は緊張しながら言った。そして、教えられたとおり一旦受話器を置い

た。一〇分くらい待っていると、チリンリリンと電話の音。私は慌てて受話器を取った。「今日の近畿地方は・・・」と天気予報が聞こえる。「わぁ、やった！　電話かけた！」と私は叫んだ。そんなに暑い日でもない春休みだったと思うけど、体中汗がびっしょりだった。

そんな電話から一〇数年が経って、街に公衆電話が出現した。また、各家庭に黒い電話器が普及した。しかし番号はひとつずつ指でダイヤルを回さなくてはならず、とても面倒だった。一回一回下までしっかり回す。市外だと十回は回す。

私は知人の選挙運動の応援に行って、たくさんの家へ電話を掛けたが、とても大変だった。これ、回すのでなく押すだけならいいのに、と思っていたら、プッシュホンが出現した。これは便利だと喜んでいたら、次は携帯電話になった。ポケットにポンと電話を放り込んで持ち歩ける。夢のような話だと喜んでいたら、今度はスマホ。

さすがに、スマホは私には手が出ない。いろんな事を調べたり出来て、とても便利だと分かっていても、私の頭ではあんな難しい物は無理無理。そう思いながら、欲しい気もする。

考えてみれば、携帯で電話を掛けて、Eメールや Cメールを打って、写真をパシャンと撮ってメールで送ることもできる。誰に教わったわけでもなく、自分で考えて、説明書を読んで出来るようになった。この調子でいけば、スマホも出来るようになるかもしれない。

しかし、同年代の友達でメールの出来る人はいないし、ときどき娘や孫と連絡を取り合うくらいしかない。やはりスマホなんて買っても高齢者には宝の持ち腐りかと諦めることにした。

電話に限らず、電化製品の発展にはほんとに驚かされる。テレビを始め、掃除機、冷蔵庫、洗濯機、エアコンなど、すべてあれよあれよと思う間に進歩した。書き出せばきりがないほど便利になり、昔を思い出しては「有難い世の中になっ

たものだ」と感謝している。
長生きはするものだと、つくづく感じる今日この頃です。

電話

疎開先での思い出

前に書いた「戦争の思い出」を孫にも読んでもらった。「感想は？」と問う私に「空襲は少しの時間だのにあれだけ長い文を書いて、田舎の疎開は一〇年居住してたったあれだけしかないのか」と指摘された。田舎へ行ってすぐ終戦を迎えたから、戦争の思い出は田舎にはない、と言い訳をした。でも、実は田舎には、私の若き日の思い出がたくさん眠っているのだ。

大阪からの疎開先は、両親の郷里である奈良県添上郡月ヶ瀬村、字（あざ）石打という所だった。ここでは学校を卒業すると、女子は結婚するまで、男子は二十五歳まで、月ヶ瀬村石打青年団に入団することになっていた。各事業に参加するしないは自由だが、一応誰もが入団する。私も他所者だが入団し、いろんな催物などに参加してきた。

今でいう「イベント」がいろいろとあったが、中でも四月三日は村のお祭りで、

その時に青年団は演芸会をして村の人々を楽しませることになっていた。まだテレビもなく、村には映画館などもなかったので、村の人々は演芸会を楽しみにされていた。演ずる若者の側も、日々の稽古などもあって、とても楽しいイベントだった。

幸い芝居に詳しい人が二人おられ、本格的に指導して下さった。演目は「番町皿屋敷」「忠臣蔵」「大阪落城の月」など。指導の方が台本や役柄を決め、衣装やカツラを手配して下さったので、私たちはセリフを覚えたりするだけだった。芝居と芝居の幕間には、歌を歌う人があり、舞踊もあり、漫才もありで、なかなか本格的な演芸会だった。

私が十八歳のある日、同級生のM君が私に「今年の祭、何に出るのか」と訊いて来られた。「祇園祭の芸者」と答えると、「そしたら俺と一緒に踊らないか？　旅笠道中」と誘われた。踊りの好きな私は「踊る、踊る！」と返事をした。

ちょうど農閑期でもあり、私は踊りの先生のところへ通って稽古を付けてもら

った。やくざ者の旅笠道中、男はすげ笠を持って縞の合羽を着て、女は三味線を持って踊る。

「♪夜は冷たい　心は寒い」と始まって、二人調子を合わせ、稽古の時には上手く踊れた。見ていた皆に褒められ、私としては自信満々だった。大阪にいる姉たちも友達を二人連れてわざわざ観に来てくれることになった。私は浮き浮きした思いで、本番を待った。

「農家の皆さん、こんばんは。一日の仕事、ご苦労さん。これから始まる演芸会、お宮のお庭で、さあどうぞ」と、小学生の可愛い合唱から演芸会が始まった。私の出番は八番目だった。七番の漫才が終わり、司会者が「次は踊りで、旅笠道中です」と言った。私はドキドキしながら、舞台の袖で待った。

ところが、音楽がなかなか鳴り始めない。いつまで待っても始まらない。やがて会場がガヤガヤし始めた。そして司会者の「すみません。八番は飛ばして九番に移ります」という声が聞こえた。「えっ、なんで？」「おい、どうした？」と私

たち。事情を聞かされて、私たちは愕然とした。なんと、レコードが真っ二つに割れていたのだ。レコード担当の人は、「すみません。知らぬ間に・・・」と真っ青な顔、分団長はオロオロ。私は、思わず涙がポロリとこぼれた。

割れているのが分っていたら、係の人が善処してくれたはず。寸前まで知れないように、割れたレコードをボール紙のカバーで隠してあった。誰がこんなことをしたのだろう。

会場ではプログラムが進んでいる。もうすぐ「祇園の芸者」に出演しなければならない。いつまでも泣いていられない。M君は「ごめんな、こんなことになって」と謝ったが、何もM君のせいではない。ひょっとするとM君を好きな人がいて、その人の嫉妬かもしれない、と私は思った。でも、いつまでも考えていても仕方がない。私は「旅笠道中」の衣装を脱ぎ捨て、今度は訪問着を着てカツラも替え、「♪月はおぼろに東山」と踊った。しかし、心は晴れず、何ともやりきれない思いで演芸会は幕を降ろした。私に限らず、皆が不可解で、不愉快な気持ちだったと思う。

結局、写真も撮ってもらえなかったが、あの踊りをもう一度踊ってみたいと思うことがある。人に恨まれるようなことをした覚えはないが、それでも誰かに恨まれている。人の心はほんとに難しいものだと、このとき私は学んだ。

毎年運動会があったが、私は運動神経が鈍く、どうも苦手だった。その代りに雄弁大会とか研究発表は得意で、壇上に上がってよく発表をした。今でも誇りに思っているのは、研究発表大会で梅肉エキスの発表をし、月ヶ瀬村で二等の賞をもらったことだ。

月ヶ瀬村は梅の名産地で、どこの家にも梅があることから、梅肉エキスを作ることにした。今では一般に薬局で販売されているが、当時はあまり知られてなかった。梅をおろして、それを布巾で絞り、とろ火でその汁を煮詰めるという簡単なものだが、腹痛や下痢には特効薬と言われている。その発表を見ていた人から「来年も出てね」と言われた。

翌年は織物の研究をすることにした。家の近くに藤の木がたくさんあり、母がよく「藤は軟らかで丈夫でいい」と言って縄の代用に使っていた。そこで私はこの藤を使って織物を作ってみようと考えた。

藤の皮を剥ぎ、ヨモギを使って染めてみたら、美しいグリーンに染まった。これを縦糸に使い、横糸にはクチナシの実で渋い赤に染めたものを用いた。母に教わりながら機織に掛けて布を織りあげた。最初は簡単な物からと思い、帯を織った。赤と緑の市松模様の帯が出来上がり、我ながら良く出来たと微笑んだ。

研究発表には、織り上げた実物を持参して臨んだ。論文五〇点、時間二五点、態度二五点の一〇〇点満点で、一〇名の審査員によって厳しく審査される。月ヶ瀬村には、石打、尾山、月瀬、桃香野、長引、峠と六つの字(あざ)があり、各地区から三名、合計十八名が発表する。男性は主に稲作の研究をされ、黒板に大きなグラフ用紙を貼って発表する人が多かった。みんな「我こそは」と気合を入れて発表し、その日は青年団一同が参加して応援する。時には野次が飛ぶこともあ

った。

その中で、私は一等賞を獲得した。応援に来てくれた仲間は大喜びで、もちろん私も天にも昇る気持ちだった。翌月には添上郡の発表会があり、奈良駅近くの女学校が会場だった。村の予選を勝ち抜いてきた人ばかりでレベルが高く、とても緊張したが、そこでも私は二等の成績を取ることができた。そのとき貰った賞状は、今も自宅の箪笥の中で眠っている。先日それを出して見ると、赤茶色に変色しており、とても懐かしい思いに浸った。

こうして私は自分の手柄の如く自慢を書いてしまったが、その裏には大勢の方々の協力や苦労話もある。何度も発表の練習をしたが、その都度青年団の仲間が学校まで出て来て練習に付き合い、「言葉が重複している」とか「顔をもっと上げて喋れ」とか、いろんなアドバイスをいただいた。私一人の成果でなく、みんなの力が集まって、賞を取ることが出来たのだと思っている。

発表会の後には、祝賀会とか打ち上げとか言っては集まり、たいていは肉飯で

お酒を飲んで、歌って喋って皆で楽しんだ。田舎では他に娯楽がないので、そうしたことで皆が楽しみ、互いに知識を高め、交友を温めて、肩寄せ合って生活していた。ほんとに素晴らしいことだと思う。祝賀会に行くとき、母からは「皆さんのお力を借りて賞を戴いたのだから、決して偉そうにしてはダメ」と釘を刺された。

祝賀会ではご馳走の肉飯を食べたが、普段の田舎の食事は、朝昼は茶粥、夕食は麦飯と決まっていた。茶粥は、まずお茶を沸かし、その中に一合くらいのお米を入れて炊く。ある程度炊いたら、適当に切ったサツマイモを入れてまた炊く。お茶で炊くと米が締まるらしく、サラサラのお粥の出来上がりとなる。

朝、何杯かのお粥を食べても、野良仕事をするからすぐに空腹になる。だから、十時と三時には必ずおやつ（「けんずい」と言った）を食べる。けんずいもやはりお粥だ。ヤカンの頭からお粥を一杯入れて、木で出来たお玉ですくって食べる。ヤカンにお粥を入れるとは驚きだが、持ち歩くのには便利だった。

青年団の集会の時、食事についても「こうした方法が良い」とか、「いいえ、こうすべきだ」とか、いろいろと意見を交わす。ある男性が面白い話を聞かせてくれた。白い茶碗にお粥を一杯注いで食べていると、茶碗の底の方に黒豆が二個入っているのが見えた。ところが、箸で挟んでも挟んでも、なかなか挟めない。どうして？と思ってよく見ると、自分の目玉が映っていたのだった。自分の家のお粥はそれほど薄いということで、皆で大笑いをした。

夜はお粥でなく御飯だったが、白米五合に麦五合を混ぜたもので、「ごんごごんごの釣り鐘飯」とよく言った。

ある日、奈良市から保健所の人が来て、村中の人の健康診断が行われた。その結果、ほとんどの人が胃下垂や胃拡張と診断された。お粥の食べ過ぎで胃が大きくなり、町の人の三～五倍くらいになっているとの指摘もあった。その後、食生活は少しずつ改善されていったのだろう。今ではお粥を食べることは少なくなったようだ。田舎へお墓参りに行ったときなど、親戚でお昼ご飯を御馳走になるこ

とがあるが、いつも白い御飯だ。

自分の手でお米を作りながら、お米を少しでも節約できるようにと茶粥を炊き、御飯のときも五合五合の釣り鐘飯を炊かねばならなかった。その時は笑い話で終わっていたが、当時はまだ国全体が食糧不足で、政府の供出命令がきつかったのか、農家の方々も戦後長いあいだ苦労をなさっていたのだと思う。

疎開先での思い出は尽きない。戦争が終わった後も長くそこで暮らし、大阪生まれとは言うものの、田舎の生活にすっかり浸かって育ってきた。

私は、ろくに学校も出てないし、たいした教育も受けていない。でも、疎開先の石打ではいろんなことを経験させていただき、大切なことを学んだと思っている。青年団活動を通じて様々なことに興味を持ち、暇さえあればよく本を読んでコツコツと独学をした。当時は勉強すればすぐにその効果が現れて楽しかった。

八十代半ばを迎えた今も読書が好きで、よく本を読む。また、認知症にならないうちにと、昔のことを思い出しては、こうして文章を書くようにしている。こ

んな拙い文章でも、読んで下さる方がおられるのは、とても有難いことだと深く感謝している。

編集後記

徳田　寿

母がエッセイを書き始めると、編集係の僕はちょっと忙しくなる。まずパソコンを使って清書をして、母がそれを読み返して手直しを加え、原稿が仕上がったら、やたら紙が詰まるオンボロのプリンタでひたすら印刷をして製本。

僕が加筆修正をしているのではないかと思われている向きもあるようだが、それは違う。「ここ、ちょっと分かりにくい」とか「もう少し詳しく書いたほうがいい」とか、いかにも編集者らしき注文を付けたりするが、文章そのものは、ほぼ母が書いたまま。八十代半ばにしてこれだけ書けるのは、息子の僕から見てもなかなか凄いことだと思う。

母は子供の頃から本が好きだったようで、今でもよく読書をしている。息子も娘も老眼だのに、母はまだ眼鏡を掛けずに文庫本を読む。本に飽きたら編み物を始め、それに飽きたらまた本を読む。自分で何かを書こうとするのは、そうした日常生活の延長みたいなものなのだろう。

前回は戦争にまつわる辛い記憶を綴り、今回はそれに前後する当時の生活や様々な思い出について、ゆったりした口調で語られている。「疎開先の話が短い」と孫に指摘されたのがよほど悔しかったのか、今回はかなり長く書いている。

母にとって、生まれ故郷の大阪には空襲の恐ろしい記憶ばかりが付きまとい、貧しいながらものんびり過ごした疎開先のほうに深い郷愁を感じているのだろう。墓参りなどで石打の村を訪れるとき、母はほんとに懐かしそうに周囲の風景を眺め、当時の思い出を語る。「またその話を書けばええやん」と言うと、「そうやなぁ」と母は遠い目で回想に耽る。

母が再びこのようなエッセイを書こうと考えたのは、前作を読んで下さった方々から頂戴した御感想や温かい声援の賜物である。中には、わざわざ母に会いに来て下さった方や、母の文章を機関誌に転載いただいた方などもおられ、誠に有難いことだと深く感謝している。おかげさまで、文章を書くことで母の生活に活気が生まれ、体はあちこち悪いながらも、頭と口だけはまだまだ達者だ。

本人は「もう書くことがない」と話しているが、長い人生を振り返れば、題材はいくらでもあるはず。あるいは日々の生活を綴る日記のようなものでもよいから、今後とも暇に任せては執筆を続けてくれるよう願っている。

とりわけ戦争体験については、その時代を生き抜いて来られた語り部がだんだん少なくなる中、貴重な教訓を次代に伝える生き証人として、さらに語り続けてほしいと願う次第である。

撮影：谷口菜穂子さん

谷口さんは息子の高校の後輩で、プロの写真家さん。前作「戦争の思い出」をインターネットで読んで、わざわざ会いに来て下さいました。こんな年寄りでも若く見えるように撮っていただき、ありがとうございます。